姫(休載)

SEI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
姫（休載）

【Ｎコード】
Ｎ６８５９Ｃ

【作者名】
ＳＥＩ

【あらすじ】
何故、私たちはこんなことを、しているのかな？男、友情、薬、セックス・・・。切なく、儚く、愛しい女の子たちの物語。彼女たちを、見てあげてください。短編集です。

前原祐未編

いつからか、私の周りには汚い男共でいっぱいだった。そして、いつでもいいから死にたかった。
セックスしてても思うのが、気持ちよさよりむしろ死にたいという思い。
男はお金を置いて家に帰る。私はまた、夜の街に溶け込んでいく。
そして、お金がありそうなカッコイイ男を見つけて誘う。
これが、私の毎日だった。

前原祐未

私は普通の私立高校に通う、ごく普通の高校生。彼氏なしの初体験もまだの子供だった。
「前原祐未です。よろしく」
入学後の自己紹介。簡単にすました。
元々、普通科に進んだ私のクラスは、男子二十五人女子十二人のクラス。男子は可愛い子を頭をキョロキョロしながら探す。
バカみたい。
「吉崎加織ですっ。よろしく〜」
私の隣の女の子。男子は彼女に釘付けだった。
私にはない、肩まである髪。リップを塗ったうるうるの唇。まつ毛が長くて、大きい眼。長身で柔らかそうな胸。多分、男子の中ではパーフェクトなのだろう。とても、同年代には見えない。
「よろしくね。祐未ちゃん」
これが、彼女との出会い。そして、人生が変わった瞬間だった。

加織は私と正反対な性格をしていた。私は控え目な性格だけど、加織は活動的。何を考えてもネガティブだけど、加織はポジティブ。びっくりするほどの、性格が真逆なのだった。そして、真逆なのにも関わらず、私たちは気があった。
「へぇ～。祐未ちゃん、絵ぇ描くの上手いね～」
加織は私の描いた絵を見ては可愛い笑顔で上手い上手い、と言ってくれた。私は正直、恥ずかしかったし、嬉しかった。
ある時、お昼ご飯をいやいやつついていると、だんだんと話がコイバナになってきた。
「私、昨日フラレたばっかりぃ」
梨花子が今にも泣き出しそうな声で呟く。
「たしか、梨花子のカレって年上だったよね」
沙織が聞く。
「うん・・・五歳上」
「五歳上っ！？」
みんな驚いてしまった。
「う～。何よ～」
梨花子はみんなの驚きにびっくりしたのか、微妙に拗ねていた。
「だって五歳上って。梨花子って年上好きだったんだ」
「ううん。カッコイイ人だったら年齢関係なし（ｏ・ｖ・ｏ）」
笑顔で言った。
「ねぇ、加織は？可愛いんだから彼氏ぐらいいるっしょ？」
「えー。私はいないよ～」
「うそー。絶対いるでしょ！？」
みんなが笑いながら加織をせめていく。私はその様子をじっ、と見ていた。
「ちょっ。祐未ぃー。助けてぇ～（＜＿＞）」
色っぽい声で言われましても・・・。仕方ないので助けてあげることに。
「はいはい。加織は彼氏いないよ。いたらここにはいないでしょ？」

「なにっ。屋上か？屋上に行くのかぁー」
ますますヒートアップ。
どうしようもないので、加織を連れて屋上に向かう。
「いっやー。ごめんねぇ」
「いいよ。気にしないで」
単に私も逃げたかったし。・・・あの中で、私だけがセックスをしていない。だから、まだなんだと思われるのが嫌だった。あの流れだと、その話になるから。
「だけど、あれだねぇ～。祐未ちゃんさぁ」
ニヤニヤしながら加織が言う。
「前髪上げると可愛いと思うのよねぇ」
などと、突然変なことを言い出した。
「いいよ。私のことなんて。それより、ホントはいるの？いないの？」
加織はああいう話に持ち込まないと願いつつ、ちょっと気になり、聞く。
「ん～。いやぁー。私は付き合えないよ」
「なんでよ。顔可愛いし、スタイル抜群だし、性格もいいし、頭もいいなんて、こんなにパーフェクトな女の子なんてなかなかいないよ」
「あははっ。ありがと。でもさ、私は付き合えないんだぁ・・・。絶対に」
「なんでよ？」
加織は、儚くて幼くて、それで、愛しい笑顔を見せ、言った。
「私の身体、すでに汚れているからさ・・・」
暖かい風が、私たちの髪を乱す。ついでに、スカートも乱してくれた。
「それ・・・。どういう」
「私ねっ。出張ホステス、やっててさ」
「！！」

衝撃的だった。いや、その前にショックだった。
「私の身体はね。もう数えきれないくらい、男に抱かれたの」
「・・・・・」
「だから、私は付き合えないよ」
それだけを言い残し、加織は屋上を後にした。

あれこれの春が過ぎて、夏が来た。私にとって、運命の夏でもあった。
変わったことと言えば、あれだけ付き合えないと言っていた加織が一個上の先輩と付き合い始めたことだけ。
「なんでも、サッカー部のちょーカッコイイ先輩らしい」
と梨花子からの情報。
私は、またなんで付き合い始めたのか不思議だった。夏休み前に加織に聞いたら「何にもないよ。ただ、彼を好きになっただけ」と笑顔で言った。
それでも、少し不安だった。
夏休み、七月の半分は補習で潰れ、明日から本格的に休みに入ろうとした頃だった。何気なく街を歩いていると、加織が噂の彼と並んで歩いていた。
「加織だ。ああ、デートかな」
私は呟いて、二人に気付かれないように二人の横を通り過ぎた。
チラッ、と流し目で見ると、加織はあまり楽しそうな顔をしていなかった。
疑問に思った私は、時計を見て、加織たちの後を追ってみた。
どんどん、路地裏に入りこんでいく。
「どこ行くんだろ。加織」
不安が募った。
そして、加織たちは、数人の男たちがいるところで止まった。加織の彼が、何やら話している。
「なんだろう」

私は隠れながら、その様子を伺う。
すると突然、一人の男が加織の制服を脱がし始めた。
「えっ」
私は、頭が真っ白になった。何故、加織は襲われてるのだろう。何故加織の彼は止めないのだろう。
男は立ちながら器用に加織の身体を求めていく。
「加織・・・」
私はだんだんと、身を乗り出していく。
「なに？君」
耳元で、爽やかな風のような声がした。
「きゃっ」
私は振り向いて逃げようとする。が、逃げられない。
「へぇ。俺たちのレイプ、見てたんだ」
「あっ、えっ？」
いま、俺たちって、言った？
「遊んであげる」
ずいずいと、私は隠れ見ていた路地裏の奥に押される。先は、真っ暗で行き止まり。
「はい。オッケー。少し暗いけど、お互いの顔見れればいいよね」
その時、初めてその男の顔を見た。
大きい瞳を持った、ビジュアル系の優しそうな男。
「大丈夫。優しくするから」
「あ、あの。あっちで襲われてる女の子、私の友達なんです」
何故、私はこんなことを言ったのだろうか。
「へぇ。加織ちゃんの。彼女も可哀想だよね」
「えっ？」
「あの子ね。男見る目ないよ。だって、女襲いで有名な清水と付き合っちゃって。でもまぁあいつ、加織ちゃんの弱み握ってるから、それを言えば加織ちゃんは運がなかったのかな」
「な、なんですか。それ」

男はくすくす笑う。
「だって彼女、仕事でオッサンとエッチしたこと、清水にばれちゃったからさ」
「・・・・・」
私は確信した。そして、加織を助けてあげないといけない、私は思うがままに言った。
「加織を、助けてあげてください」
「えー。なに言ってるの？加織ちゃんほどの上玉、なかなかいないんだよね。あっ、そっか。君、友達助けたいのか」
私は目でうなずく。そして、睨む。
「んー、そうだなぁ。君が代わりになってくれるなら、いいよ」
「代わり？」
「そう。これは取引きになるね。加織ちゃんとは手を引く。代わりに君が犯される。でもまっ、君は俺好みだから、あいつらには抱かせないようにするよ」
男は笑顔で言った。
「・・・わ、わかった」
「話が早くて助かる」
男は、コウジと名乗った。
「んじゃまっ、ここにいて。逃げたら、加織ちゃんは二度と君の前には現れないかもよ？」
そのあと、コウジは加織を襲っていた男と話をして、加織は助け出された。
「加織・・・」
加織は、コウジに言われて、私のところに来た。
「バカね。祐未・・・」
加織は、今にも泣き出しそうな顔をしていた。
「私なんか、助けなくてもよかったのに」
「なんで・・・。そんなこと、ないよ」
「・・・私ね。初めてセックスしたの、小学生のときなんだ。相手

はお兄ちゃん。でもね、それは私が望んだことなの。私が、お兄ちゃんのこと好きになって、お兄ちゃんが寝ているときにベッドの中に潜り込んだの。それでね。キスもしたし、私の中に射れてもらった。痛かったけど、気持ちよかった」
「・・・・・」
加織は、切ない声で、私に呟くように続ける。
「お兄ちゃんさ。いま、重い重い病気なの。お父さんとお母さんは頑張って働いてお兄ちゃんの病気治そうとしているけど、なかなか・・・。だから、私もこの身体を売って、お金貯めて、お兄ちゃんを治そうとしているの。私、頭悪いから、こんなことしかできないから」
「・・・でも、やっぱりレイプされるのは、見過ごせないよ」
「そうね・・・。でも、ありがとう。私、学校辞めるよ。そして、そのままホステス続ける」
「加織・・・」
「祐未は？このままコウジに犯されるの？」
はっ、と私は今、思い出した。私は、これからどうすればいいのだろう。
「祐未ちゃんっていうんだ」
すると、後ろからコウジが出てきた。
「・・・・・」
「なんだよ。その目はさ。大丈夫大丈夫。もう俺たち、加織には手ぇ出さないって」
「私は・・・どうなるの？」
「うーん・・・。加織ちゃんさ。さっきホステス続けるって言ってたよね？」
「・・・うん」
すると、コウジはくすくすと笑い始めた。
「なに？」
「いやいや。実はね。さっき検挙されたらしいのよね。加織ちゃん

が勤めていたホステス」
「はっ・・？」
コウジは、愉快そうにくすくす笑い、加織は愕然としていた。
私は、やっぱりこのコウジが許せなかった。
「だからさ。一つ提案。加織ちゃんは、俺のうちで匿う。そのかわり、祐未ちゃんはまぁ、売春じみたことをしてお金を稼ぐ。その半分は、加織ちゃんのお兄ちゃんの治療費に回すってのはどうかな？」
「そんな・・。笑いながら言わないでよ。第一、祐未には将来とかがあるのよ」
「いいよ・・。私、やる」
私は、力いっぱい、喉の奥から言葉を出す。
「祐未っ！？何言ってるのよ。祐未には私のこと関係ないのよ」
「いい。それでも。だって・・友達が困ってるんだもん」
「それに、加織が捕まったら、余計大変になるよ」
「で・・でも・・」
「ただし、私はカッコイイ人しかセックスしないから。いい？コウジ」
「んー。俺はいいよ」
加織は納得してないけど、私は承諾した。
「んじゃまず、テクニックを教え込まないとね」
コウジはくすくすと笑いながら、私たちをコウジの部屋へと案内してくれた。

「へぇ。祐未ちゃん初めてなんだ」
コウジは、ベッドで横になっている私を、脱がしながら話しかける。
「・・・うん」
私は顔を赤くしながら言った。
「そっか。じゃ、最初はテクニックどころじゃないね。ゆっくりと慣らしていこうね」
そう言うと、コウジは私のブラを外した。

「怖い？」
「す・・こし」
「そっか。じゃ、キスしてあげる」
甘いキス。私はそれだけでアソコが濡れ始める。
コウジは、ゆっくりと私の胸を揉み始めた。最初はなんだか変な感じだったけど、だんだんと気持ちよくなってきた。
「可愛いね」
コウジは笑顔で言うと、胸の小さな膨らみをいじり始めた。
「っ・・っっ」
「声、出せばいいよ。恥ずかしがらないでさ」
コウジはそう言ったけど、やっぱり恥ずかしい。
すると、コウジは胸に飽きたのか、じんじんしている私のアソコに手を近付かせる。
「すごい。濡れてるね」
パンツ越しから、いやらしい水の音が聞こえた。
「っ・・んっ。はっ。あっ」
我慢できずに、声が出る。
すると、急にアソコがジーン、となった。
「ああっ」
「あれれ？イッちゃったんだ」
コウジは楽しそうに笑うと、ゆっくりと、私のパンツを脱がしていった。

・・・私は、そのときに、セックスが好きになったのかもしれない。
「それじゃあ。行こうか。祐未ちゃん」
「うんっ」
あれからまだ、半年も経っていない。
いつになったら、私はセックスの呪縛から逃れられるのだろうか。
いや・・・。多分、逃れられないのだろう・・・。

前原祐未編。　了

坂口凛編

「なんだ。まだ足りないの」
私は、相手を見下すように言った。
「ダメかな？凛ちゃん」
相手は、いやらしい笑みを浮かべて言った。
「うーん。金額によるかなぁ」
私はくすくす笑いながら言った。

「いくらかな」
「追加で五万」
「高いね」
私は当たり前でしょ、という顔をした。
「オーケー。出そう」
「そう。なら、いいよ」
まだ、夜は始まったばかりだしね。

坂口凛

身体が重い。まさか、二回とも中に出されるとは思っていなかった。
相手には事前に精子を殺す薬を飲んでもらっているから、妊娠の心配はない。
「じゃ、ホテル代込みで八万ね」
男はテーブルの上にお金を置いた。
「またね」
私はハダカのまま、男に手を振った。気がつけば、もう零時過ぎ。

「あーあ。シャワー浴びよ」
私は重い身体を引きずりながら、シャワー室へ向かう。ポタッポタッ、とアソコから白い液体が落ちる。
「出し過ぎよ。あの人」
悪態つきながら、私はシャワー室に入る。綺麗なお湯とともに、このベタついた身体を洗い流したかった。
「はふぅ〜・・・」
私は、セックスのあとのシャワーが好きだ。汚れた身体が綺麗になるから。
シャワー室から出る。私は下着とダブダブの寝巻きを着て、ベッドに腰かけた。テレビを付けるかラジオを付けるか悩み、テレビの電源を入れる。
つまらないお笑いがやっていた。
「何よ。これは」
私はため息混じりに言った。
コンコン。
「ん？」
扉のノック音。今日はさっきの客で最後のはず。
仕方なく、身体を引きずりつつ、扉を開ける。
すると、外の奴は勢いよく中に入ってきた。
「えっ。ちょっと」
「へぇ〜。いい部屋でヤッたじゃん」
どこか懐かしい声。でも今はどうだっていい。
「誰よ。あんた」
「久しぶり。元気にしてた？凛」
クルッ、と振り向くと、そこには昔の面影を残した男の子。
「シオン・・・」
一番会いたくない男だった。
私は、昔から両親はいなかった。物心ついた時には施設の中。しか

もそこは、とんでもなく辛い場所だった。
もともと、子供を育てる気はないのだろう。三食は出ても、あとは好き放題。虐待はされるはイジメられるは年頃になれば性的なことを思春期の男子にされるはと、ホント、私にとっては地獄のようなとこ。
今は、その施設はどうなったかは知らない。私は、十三のときに施設を出ていったから。
とは言っても、お金がない。だから、身体を売るか売らせるか。時には風俗にも行ったし、薬も売ったりした。
そんなときに、シオンに出会った。
春日崎シオン。お金持ちの裕福な家庭で育ったらしいけど、退屈して夜の街で遊んでいたらしい。
「ふぅん。君がウワサの坂口凛チャンね」
シオンを逆ナンした私は、バーで話をした。
「ウワサ？」
「すっげぇ締まりのいい女のコがいるって話。あの締まりでその値段は安いってさ」
「ああ・・・。そう」
基本、私はオジサンとはしない主義。若いコ目当てでヤッてたら、そういうウワサが広がったのかな。
「なぁ。夜の街って楽しいもんなん？」
「さぁ。私は楽しいとは思わないけど」
「へぇー。君はそうなんだ」
シオンは愉快そうに笑う。
「おかしいね。シオンは」
「まぁーねー。さて、このあとどしよっか」
「ああうっ。私酔っちゃったかな」
もちろん演技。だいたいの男は食い付く。
「悪いねー。俺、さっき九人とヤッたから」
「はっ・・・？」

言ってる意味がわからなかった。
「正確には、九Pっての？まさか一人一万ずつ払ったらヤラせてくれるなんてねぇ」
くすくす、とシオンは笑う。
「あ、あんた正気？」
「多分、二人ぐらい妊娠するんじゃない？」
しかも、避妊無し宣言をしやがった。
「・・・・・」
「けど、ホテルから出れたかな？放心状態だったしなぁ。そんなに気持ちよかったのかな」
「あんた、いったい」
私は、シオンがホントのことを言ってるのか確認を含めて言った。
「それでもする？」
「・・・いい」
正直、今のを聞いてやる気になるわけがない。
「残念だなぁ。君で十人目になるのに」
シオンはため息をついて、バーを後にした。
翌日、私は朝からシオンの家にいた。理由は簡単。泊まる部屋がない。もちろんしていない。
「意外。もっと、六本木ヒルズとかに住んでるかと思った」が最初の呟き。だって、大金持ちとは思えないとこに住んでいるから。

そう、そこは廃校。

「変わってるっしょ？だって、学校楽しいじゃん」
なんてことを言う始末。
でも、無断で使っているわけではなく、きちんと買取って暮らしているからすごい。
そして、私が寝たのは保健室。まるまるベッドが残っていた。
「ねぇシオン。シャワー浴びたい」

私は一応色っぽく言った。
「更衣室にあるけど、G出るよ？」
「はっ？G？」
「ゴキブリ」
途端、背筋が凍った。
「ば、ば、バカぁー！！」
「あはは。なんだよ。たかがゴキブリぐらいで」
シオンは楽しそうに笑っていた。
それからか、私はちょくちょくシオンの家に行くことになった。何故か、シオンの傍は温かい。だからかもしれない。シオンも、そんなに拒否らなかったし。
そして、いつの間にか、私たちは、愛しあっていた。いきなりすぎてあれだけど、私はいつの間にかシオンが好きになって、シオンもいつの間にか私が好きになった。私たちはいつか、結婚することを夢見ていた。だが私たちはまだ十五歳。子供だったから、まだまだ早い。
だけど、私はシオンとの子供が欲しくて、売春行為を辞めた。シオンも、買春を辞めてくれた。
そして、私は妊娠した。
「すごいな。この中に、俺の子が入ってるんだ」
「当たり前でしょ。私たちの子供よ」
その時、二人で笑いあったのを、鮮明に覚えている。
そう、あんなことがあるまでは・・・。

病院の一室。十五の私たち二人に伝えられた一言。
「流産・・・」
信じられなかった。私は、あいつらを憎んだ。
昨日の夜。私は買い物途中で、レイプされた。
五人の男に、五回、中に出された。中には、子供がいるのに。それをシオンに告げると、私は腹痛で倒れた。

「原因は、昨晩されたレイプかと・・・」
医師の辛い宣告。
私は、必死に涙を堪えていた。シオンは、ただ黙っていた。

その翌日、シオンはいなくなった。

こうして、五年の歳月が過ぎて、シオンは私の前にいる。
「な、何しに来たのよ」
「いっやぁー。お前見つけるの、楽だったよ。どっかでホテル嬢してるって噂、あったからさ」
笑いながら、シオンはソファに座った。何故だろう、息が上がってる。
「だからっ。何しに来たのよ」
「迎えに来た」
「はぁっ？」
意味がわからない、と呟きつつ、私はベッドに座る。
「さて、どこから説明しようかな」
「とりあえず、謝って」
私は顔を伏せながら言った。
「・・・ああ。ごめん」
「なんで、逃げたのよ」
久しぶりに、涙が込みあげてきた。さっきの驚きとはまた、違う感情。
「・・・・・」
「私、寂しかった。どうしたらいいかわからなかった。だから私、また売春始めた。けど、シオンが傍にいないと、やっぱり私、不安だよぉぉ」
とうとう、涙が出てしまった。恥ずかしい。
「凛・・・」
そう呟くと、シオンは私を優しく抱きしめてくれた。

「ごめん。もう、お前を一人にはしない。今度こそ、俺が守ってやる」
「シオン・・・」
ホントに、シオンの傍は温かい。
そして、久しぶりのキスの味は、少ししょっぱかった。

薄暗いホテルの一室。私とシオンはベッドの中にいた。
「えっ？シオンのお父さんに会ったの？」
私は、シオンが五年間何をしていたのかを聞く。
「それで話した。俺たちのこととか。親父は出来るかぎり俺たちを支援してくれるらしい。だから明日、俺のばあちゃんの家で世話になることにしようって考えた」
「ふぅん。そっか」
私は、なんだかフクザツな気持ちになった。
「凛を迎えに行く準備ができたから、迎えに来た。俺、親父の下で働くことにする。それは、親子とかそういう関係でやるんじゃなくて、社長と正社員として働くよ。その間、凛はばあちゃんやメイド長さんとかに家事とかを習えばいい」
「だよね。いつか、二人だけの家に住みたいもんね」
「三人だろ？」
そう言って、シオンは私のお腹を撫でた。
「そう、だね」
二人で、笑いあう。
「・・・でもな、凛。実はな。俺、警察に行かないと、いけないんだよな」
「えっ・・・？」
「俺たちの子供を殺した、凛をレイプした男たちの、殺しを依頼したんだ。実行犯はとっくに捕まってる」
「シオン・・・」
「だから、ごめんな。ホントは、今日行く予定だったんだけど、ど

うしても、凛に謝りたかった」
私は、少しだけ動揺してたけど・・・。
「シオン。私、待ってる。シオンが帰ってくるまで待ってるから」
「凛」
だから私たちは、もう一度抱きあった。
その翌日、私たちは警察署に向かった。そこで、シオンは自首。シオンはさらに頼みこんで、私をシオンのおばあちゃんの家に向かった。
「あのっ。シオンの罪はどうなるのですか？」
「そうですね。ただ依頼しただけですし、計画したわけじゃない。罪は軽いと思いますよ」
親切な警官に教えられ、私は胸を下ろした。
おばあちゃんの家に着くと、シオンは一通り説明して、私を紹介した。
「シオン。体に気をつけて、元気に帰ってくるんだよ。私は、凛ちゃんと一緒に待ってるから」
おばあちゃんは、とても優しい人だった。
「行ってらっしゃい。シオン」
「いってくる。凛」
私は、シオンを笑顔で見送った。

シオンの罪は、いい弁護士さんのおかげで、懲役三年ですんだ。あと、三年間。私はお腹の子供とおばあちゃんと一緒に待っている。お父さんも、新入社員を待っている。
だから、私は辛くない。
シオンを待っている人たちが、私の傍にいるから。
「さて凛ちゃん。今日は肉じゃがを作るよ」
「はぁい」
シオン、早く、帰ってきてね。

坂口凛偏　了

新垣ユリナ編

拾ったネコは、いつしか大きくなってアタシのところに、やってきた。

新垣ユリナ

とにかく、アタシは変わった性格をしていた。勝気で学力より体力のほうが優れていて、女より男といたほうが落ち着いて・・・。だからアタシは、恋には臆病。好きな人がいても、告白すらできない。身体に自信があっても、性格に問題あり、みたいな。だって、中学生っていう微妙な時期でこんだけ男に近い性格よ？やっていられない。

「あー。だっりぃ」

口調も男みたい。

だから、心を開けるのは動物のみ。ホント、外見は男で中身は乙女。なんだかなぁ（？）

そんなある日の出来事。まぁ、お残し課外された夏の日。

「ユリナってさ。なんか、無理してるっていうか、心開いてないよね」

図書部なんてつまらない部活の数少ない部員。確か、白玉カズキだったような。

「何が？」

「なんか、ユリナは淋しそう」

一応、同じクラスだから話しかけてきたのだとは思うけど、あまりにも唐突過ぎる。

「別に。無理なんかしてねぇよ」

「へぇ。不思議だね」
なんて言って、笑ってまた本に目を通す。おかしな奴というのが、最初の感想。
「でもさぁ。なんか背負ってるでしょ？」
「・・・別に」
多分、カズキは遠回りに私の事情を知ろうとしていたのかもしれない。
それでもアタシは、強がって何も言わなかった。

いつも、アタシは一人だった。両親は共働き、お姉ちゃんはもういない。彼氏と出ていってしまった。
だから、アタシは一人なのだ。そんなときに、覚えてしまった、自慰行為。
小学四年生にしては、まだ早い行為だった。
そんなある日、アタシはネコを拾った。中ぐらいの真っ黒なネコ。
家に持ち帰り、子供なりの方法でネコの体を洗った。最初は嫌がっていたネコもしだいに慣れてきた。
洗い終わって、ミルクを持ってアタシの部屋へ連れて行く。ミルクを容器に入れて出すと、ぴちゃぴちゃと飲んでくれた。
初めてもった感情。
それが『可愛い』
アタシは、どっちかというと『可愛い』より『かっこいい』に憧れていた。けど、このネコは、また捨てる気にはならなかった。
名前を『タマ』と名付けた。ありがちだけど、思いつかなかった。
両親も、私が世話をすることを条件に飼うことを許してくれた。
それから、アタシはタマの世話に明け暮れた。
遊び相手になったりミルクをあげたり散歩したりして、私はタマを精一杯かわいがった。
そして、いつの間にか、私は自慰行為を止めた。
両親も、いつの間にかタマの世話をしてくれた。なんだか、嬉しか

った。

でも、それは一時の夢の時間だった。

「タマ？」

玄関開けたらすぐに出てくるはずのタマが、いなかった。

私はカバンを置いて、家じゅうを探しまわる。

それでも、見つからない。

「逃げた？でも、戸締まりはお母さんたちが」

だから、なんでタマがいないかわからなかった。

夜、両親たちが帰ってきてタマがいないことを言うと、また今度の休日に探そうとだけ言った。

アタシは悲しくなって、泣くかわりに一晩中、自慰をした。

「んっ、あっ・・・。んんっ」

極力、声を出さないように・・・。

「あんっ。はぁ・・、あっあっ」

もう少し、激しく。

「あっあっあっ。ああっ！」

その代償の、鋭い痛み。

見ると、アソコから大量の血が流れていた。

「なに・・・これ」

アタシは必死にその血を拭いた。結果、タオルが血まみれになった。

「どうしよう・・・」

素直な疑問。アタシは、よくわからずに、明日タオルを処分するということで、そのまま眠った。

それが、アタシが背負っている、過去。

次の日も、アタシは図書室にいた。いつもとおり、カズキがいた。

「やぁ、ユリナ。どうしたの？」

「別に・・・」

アタシは少しふてくされて言う。正直、アタシもなんでここに来たかわからない。
「でも、ここに来るからにはそれなりの理由があるでしょ？」
「ほっとけよ」
アタシはほんの少しムカついて奥にいく。
すると、何故か体育用のマットとティッシュの箱があった。
「カズキ。これ何？」
「ああ。今日はね。予約があるんだ」
「はっ？何それ」
アタシがカズキに迫りながら聞くと、誰かが入ってきた。
「カズキ、いるか？」
来たのは三年生のカップルだった。
「待ってましたよ。先輩。マット出してありますんで、帰りは片付けといてください。見張りはしますし」
「悪いな。ほれ、代金」
先輩はカズキに五百円硬貨を渡す。
「おっ。女の子がいるじゃん。マット片付けなくてもいいだろ」
先輩はにひひ、と笑う。
「彼女はたまたま。僕らにはまだ早いですし、彼女は恋人ではありません」
「ふぅん。まぁいいか」
すると、三年カップルはそのままマットがあるほうに向かう。
「何、あれ？」
「わからない？」
「わかんねぇから聞いてる」
「まぁ、待ってなよ」
カズキは、扉近くに座った。
すると、女の子のあえぎ声が聞こえた。
「えっ？」
アタシは思わず、先輩たちを見てしまう。でも、本棚に隠れてわか

らない。
「な、何やってんの？あの人たち」
「聞いた通り、エッチしてるんだよ」
「なっ。な、な、な、」
アタシは赤面してしまう。
「な、なんでっ。こんなとこでっ！？」
「彼らは受験生。家に帰っても勉強さ。だから、僕は場所を提供してあげてるんだ。一回五百円でね。そこいらのラブホテルより安いよ」
「だ、だからって」
「でもすごいね。口コミで伝わってさ。あっ、ちなみに予約方法はね。僕に直接伝えるだけっていう手軽さ。一昨日は一年生も来たよ」
聞いてもいないことを、カズキは話した。多分、話したいのだろう。
「こんなの、先生に見つかんねぇのか」
大きくなるあえぎ声。
「まさか。ここは三階の端の端。運動部のランニングでも来ない、ある意味秘境だよ。来たとしても、奥まで来ないしね」
いや、声でわかると思う。
「なんで、こんなこと始めるんだよ」
「なんとなく」
「はぁ？なんとなくって意味わかんねぇ」
「んじゃ、ヒマだから」
さらりと、そんなことを言う。
「まっすます意味わかんねぇ」
「まあまあ、いいじゃん」
カズキはにっこり笑う。
正直、それにドキッとしてしまった。
やっぱり、アタシも女の子なんだな。ちょっと、ショック。
「それで。ユリナ、どうするの？先輩たち、いまフリーでやってるからいつ終わるかわかんないよ」

「どうするって？」
「帰る？帰らない？」
ああ、そういう意味。
「どっちでもいい」
「ふぅん。そっか」
カズキはまた、本に目を通した。
正直、アタシはすぐにでも帰りたかった。
「カズキ。あ、あのさっ。あれ、気持ちぃんかな？」
だんだん大きくなるあえぎ声と水音を無視しつつ、カズキに聞く。
「自慰行為に比べたら、気持ちいいでしょうね」
戸惑いもなく答える。
ああ、なんか無性にムカついてきた。
「帰るっ」
「バイバイ」
カズキは手だけ振ってくれた。
翌日、アタシは男子にカズキについて聞いてみた。
「あー、あいつ？よく知らないけど、ただあんまいい噂聞かないな。俺らより、ほらあいつ。あいつなら詳しいだろ」
指指した先には、窓側の席でカズキと話しこんでいるメガネ君。
「ふぅん」
その放課後、アタシはメガネ君に声をかけた。
「小泉っ」
「ん。新垣か」
そいつは小泉ジュン。謎のメガネ君。
「何用？」
「話、聞きたい。カズキのことで」
「カズキ？なんでよ」
「なんとなくだよっ。ほらさっさと教えろ」
アタシは半分脅迫するように言った。
「っ。あんな、何が知りたいわけよ」

「あんた、図書室のこと知ってる？」
「ああ。あれ、うちのクラスでは噂にもならないんだよなぁ」
「んなこと聞いてねぇ。なんであんなことしてるか知りたい」
「そんなの、決まってるだろ。楽しいからだよ」
「はっ？」
あんなのが、楽しいのか？
「楽しいわけ・・・」
「まぁ、一つの学校改造計画ってやつですか」
ニヤニヤ笑う小泉。殴りてぇ。
「改造計画？」
「そっ。新垣、学校楽しい？」
「ま、まぁ、それなりに」
「でも最高じゃないっしょ？」
「・・・まぁ」
なんか、飲みこまれそう。
「だから、学校を楽しくしましょうってことよ。その一つがいまやってること」
「だ、だからってあんなこと・・・」
「いいじゃん。思春期真っ盛りの性欲垂れ流しのガキには持ってこいのアトラクションだぜ。今度、図書室でカジノでもしようかな」
そんなことを呟きながら、小泉は帰っていった。
どことなく納得しないアタシは、行かなくていいのにとも思いつつ図書室へ向かった。
「やぁ、ユリナ」
笑顔で、出迎えてくれた。
「よ、よう」
アタシは呟くように言って、奥に行ってみる。
何もなかった。
「今日は予約ないよ。ただ、急に来るときがあるからね」
カズキは笑い声を出しながら言った。

「カズキっ」
「何かな？」
アタシはカズキの前に立って、言う。
「アタシがやる。出せ」
「はい？相手は？」
「・・・あんた」
一瞬の無言。
「・・・・・」
アタシはじっ、とカズキを見つめる。
「なんで、僕？」
カズキは、必死に何かを抑えるように言った。
「・・・ダメ？」
アタシは、甘えるように頭をカズキの胸に押しつける。
「理由、聞かないとわからないな」
優しく、カズキは言った。
「わかんないっ。わかんないけど、あんたとしたいのよっっっ」
「・・・物好きだね。ユリナは」
カズキはゆっくり、アタシの頭を撫でてくれた。
「何か、悪い？」
「ううん。そんなことないさ」
そして、優しくキスをしてくれた。
カズキは、アタシを優しく脱がしてくれた。まだ、ブラもしていない胸。
「可愛いね」
カズキは、アタシの胸をペロペロと舐める。
「んっ」
気持ちいいのか、よくわからない感触。
「んぁっ」
今度は、乳首をいじり始めた。
「あっ。んんっ」

これは、気持ちいい。
「可愛いね」
また、舐め始めた。今度はまた、違う感触。
「あっ、アソコもっ？」
カズキは、アタシのアソコを愛撫していた。
「ヌルヌルだね。可愛い」
その水音はだんだんと大きくなる。
「あっあっあっ」
アタシも、訳もなく声が出てしまう。
「お尻、こっち向けて」
言った通りにすると、温かいものが触れた。
「痛いと思うよ。続けるかい？」
「カズキとなら・・・いいよ」
激痛と共に、カズキのものが入ってきた。

終わる頃には、外は薄暗くなっていた。
「涼しいね」
アタシが言う。
「そうだね」
カズキが笑顔で言った。
「ねぇ、なんでしてくれたのよ」
「帰ろうか」
カズキは、アタシのカバンを持つ。それをアタシに手渡した。
「うん」
外に出ると、涼しい風がアタシたちの髪を乱す。
「僕はね。ネコになりたいんだ」
唐突に、カズキは言った。
「なんでよ」
「自由で気ままで・・・。なれたら、ユリナの家に住みつこうかな」
「なによ。それ」

アタシは含み笑いをしながら言った。
「僕みたいな大きいネコは嫌いかい？」
そう言われて、アタシはカズキを見上げる。
百七十はある身長。確かに、大きいネコだ。
「ううん。嫌いじゃない」
アタシは綺麗に笑ってみせた。
「そうそう、アタシ、あんたに言いたいことがあるんだよね」
「僕も、ユリナに言いたい、あるよ」
二人でニヤッ、と笑って、言った。

「大好き」

多分、カズキは最初っからアタシに目をつけてたに違いない。
だって、アタシはこんなにも好きになれないから。
大きなネコさん。アタシを守りなさいよっっ。

新垣ユリナ編　了

田原雫編

私なんて、生きてる価値なんてないのよ。嗚呼、だから、素直に死なせて欲しいな・・・。

田原雫

アメリカ、シカゴ。
私は、そこで十五年間過ごした。はっきり言って、日本には興味もなく、行きたいとも思わなかった。ただ、アメリカのニューヨークでテロ事件があり、家族でパパの実家に移り住むことになった。幸い、私は日本語を話せたので、それはそれでよかった。しかし、私の姉は話せないという理由でこっちに残ることになった。
私たち、家族四人（パパ、ママ、私、妹）で日本に渡った。
まぁ、私と妹は帰国子女となるのだ。
「久しぶりねぇ。恵さん。久しぶりねぇ。雫ちゃん、由紀ちゃん」
私のパパのお母さん、つまり私のおばあちゃん。私は初めて会うが、何故久しぶりなんだろうか。
「疲れたでしょ。今日はゆっくり休みなさいよ」
おばあちゃんは優しく、暖かかった。
その夜、パパが日本に来るのは初めてじゃないよ、と教えてくれた。
でも、すべて過去の話よ。繁華街のビルの屋上で私は両足を外に放り出して夜景を眺めていた。
「雫〜。まだ飲むでしょ〜」

友達の誘い。振り向くと、カクテルの缶を持って手を振る友達がいた。
「いまはいいー」
「んー。わかったぁ」
メンバーは、女の子三人男の子三人。コンビニでおつまみとお酒を買って、どんちゃん騒ぎをしている。
皆、すごく楽しそう。
私は、ぜんぜん楽しくないのに・・・。

私は近場の高校へ、妹も中学へ転校することになった。
「え～、アメリカから来た田原雫さんだ。いわゆる帰国子女だ。日本語話せるから、英語得意な男子、心配しなくていいぞ」
笑いが起こる。あぁ、あれギャグなんだ。
席は一番後ろの窓際。わかりやすくてとてもいい。
ショートホームが終わると、ドラマでもよく見る光景を体感した。
「ねぇ、アメリカのどこに住んでたの？」
「帰ってきた理由はテロ？」
「やっぱ、アメリカの料理っておいしい？」
なんの質問でもアメリカ、アメリカ。疲れます。
そんなこんなで、放課後はクラス委員長直々の校内案内。
嗚呼、それが私の出逢いだったんだなぁ・・・。
「僕、木之下敬太。よろしくね」
どこか、幼さが残る木之下敬太。身長は男の子のくせに私とあんまり違わない。顔は童顔で、かっこいいよりも可愛いの部類に入る。
そして、誰にでも優しかった。
「ここが本館の職員室ね。僕らの担任もここにいるよ」
私はずっと、木之下敬太の話を黙って聞いていた。
「それで、あの新しい建物が部活棟。運動、文化部全三十の部室があるんだ」
部活と言われても、私はあまりピンとこなかった。アメリカでは、

あまり部活とかが盛んじゃないから、別に入らなくてもよかったから。
「以上かな。どこか、見たいところある？」
木之下敬太が振り向きながら聞いてきた。私は少し考えて、言う。
「音楽室・・・あるよね」
「うん。三つ部屋があるよ。だけど、二つは吹奏楽が使ってるから行けないけどね」
申し訳なさそうに木之下敬太は言った。
「残っている音楽室。ピアノ、ある？」
「あぁー・・・。多分。でも古いよ」
「いい。連れてって」
私が頼むと、木之下敬太は嬉しそうに頷き、案内してくれた。
残っている音楽室は、北館のもっとも端のほうにあった。
「ここ、あんまり使われてないからなぁ。埃たまってるよ」
そう話しながら木之下敬太は丁寧に窓際にあった雑巾でグランドピアノを拭いていく。
「すごいね。壊れた楽器がそのまま置いてある」
私が言うと、木之下敬太はあははっ、と笑った。
「そうでしょ？先生の話だと、ここは物置状態で誰でも入れるらしいよ」
そして、木之下敬太は同時によし、と言った。
「これでいいよ。音出るかな？」
私は近づいて、ピアノを開けた。赤い布を取ると、綺麗な白と黒が並んでいた。
「このピアノ、大切にされてたんだね」
木之下敬太の言葉に、私は頷いた。
すると、木之下敬太はドの音を押した。
低くても、綺麗な音が響いた。
「ごめん田原さん。代わって」
木之下敬太は言うと同時に椅子に座った。

「弾けるの？」
私の質問に、木之下敬太は最近の曲『ＬＯＶＥ　ＭＩＮＤ』で答えた。
最初は、少しハードだなって思うリズムから、繊細で綺麗なサビに変わる。そして、サビのリズムがしばらく続いて終わる曲。歌は、上がり下がりの激しい歌手が歌っていて、カラオケで歌う人はなかなかいない。
「すごいね」
私は無関心な口ぶりながらも、口元は笑っていた。
「ありがとう。ごめんね。田原さんが弾きたいと思ってたのに」
「ううん。いいよ。気にしないで」
確かに、私は弾きたいからここに来たが、さすがにあのあとで弾くのは気が引ける。それほど、素晴らしい演奏だった。
「そっか。じゃあ、もう帰る？」
「そうする。ありがとね。敬太君」
何故か私は、木之下敬太を下の名前で呼んでしまった。
「どういたしまして」
木之下敬太は、気にせずに笑顔で言った。

あのピアノ、もう捨てられたかなぁ。
ビルの屋上は、涼しくてすがすがしかった。
彼が弾いた曲はとっくの昔に忘れさられているだろうなぁ。
「雫ぅ～。私っ、襲われちゃうよ～」
助けてという意味だろうか。でも、友達の声はやけに楽しそうだった。
「あんっ。外でするの初めてっ」
どうやら、本気でヤろうとしている。振り向くと、友達は男に丁寧に脱がされていた。周りは、笑いながらお酒を飲んでいた。
「あっ。すごっ。舐めるの、すごいぃっ。あんっ、あっあっ」
あえぎ声が聞こえても、私は無視した。パンツの中が濡れるのを感

じながらも。そういえば、と私はまた昔話の世界に意識を沈めた。
学校にも、先生たちにも、友達もできて、高校生活に慣れてきた。
教室はもうすぐ始まる夏休みと夏期補習の説明をしていた。
「あと、この前の中間、期末の赤点の奴は一日中だ。わかったか？
さぁて。皆大好き宿題だ。いいか。八月の登校日に集めるぞ。やっとけよー」
大好きじゃなぁい、と言う批判を無視して、先生は宿題を配布していく。
とは言っても、三教科のみでだいたい二十ページぐらいの宿題だった。
「宿題済ませてから遊びにいけよ～。お前らー」
そんな子供じゃあるまいし、と私は含み笑いをしながら思った。
「以上、帰ってよし」
一礼したあと、私は一人、てくてくと歩いていく。
「じゃあねぇ～。雫ちゃんっ」
数人の友達は軽く手を振って、逆方向に歩いていった。

私も軽く手を振った。そして、何事もないようにてくてくと歩く。
行くのはもちろん音楽室。がららっ、と開けると、そこには敬太がいた。
「早いね。敬太」
「雫ちゃんが遅いだけだよ」
彼はにっこり笑った。
「そうかな。まっすぐ歩いていったけど」
「だって君、いつも遠回りしてるから」
ここは一度五階に上がってから音楽室に行くのが近いが、彼は本館から北館に通じるベランダを通っていく。だから早い。
「まぁ、いいや。早く、聴かせてよ」
私は笑顔で彼に言った。

「まず、料金をいただきたいな」
彼は悪戯っぽく言った。
「敬太って、露骨に意地悪だよね」
私はブツブツ文句を言いつつ、彼に近付いた。
「はい」
ちゅっ、と私は小鳥のようなキスを彼にした。
「んっ。確かにいただきました」
ゆったりとした演奏が始まった。
終わる頃には、外は薄暗くなり始めていた。
「夏だね。もう」
二人で並んで帰る。私は隣にいる彼に言う。
「そうだね。もうすぐ、暑くなるんだね」
「私、夏は好きじゃないな。だって、暑いだけじゃない」
「あははっ。可愛い理由だね。雫ちゃん」
私は少しむっ、とする。
「じゃあ、敬太は好きなの？」
「多少ね。びっくりするほど好きじゃないけど」
いま、思った。私と敬太は正反対な性格をしているなと。
そのことを言うと、彼はまたあははっ、と笑ってくれた。
「そうだね。君は英語ができるのに理系で僕は文系。君は夏が嫌いで僕は好き。面白いね」
「面白い・・・のかな？私としてはあんまり・・・」
正反対じゃなければ、私と敬太は一緒なんだよ？
「でも、正反対でよかったと思う。だって、長続きするから」
「？」
「二人の恋愛が」
彼はとびっきりの笑顔で言った。私は、ほんのちょっぴりドキリ、とした。
「あっ、ねぇ。雫ちゃんは花火、見たことある？」
「花火かぁ・・・。あんまり見たことない」

どんなのかは知っている。
「じゃあ、見に行こう。実はさ、僕の家の真正面がすっごい見やすいんだ」
小学生のようにはしゃぎながら言った。
私はそれがおかしくて、くすりと笑った。そして笑顔でいいよ、と言った。
それから三週間後。
私はおばあちゃんに浴衣を着させてもらった。
「いい、雫。敬太はすごく優しいから大丈夫だとは思うけど、もしものときは逃げなさいよ」
ママが心配そうに言った。
「いいじゃないか。恵さん。あたしゃ、敬太君の子供だったら大歓迎だよ」
「おばあさま。この子はまだ十六ですよ」
「わはは。冗談だよ」
するとおばあちゃんは、私の耳元でささやいた。
「いいかい。雫。浴衣はね、一度脱ぐと着るのに面倒なんだよ。雫は着られないから、あたしが見れば一目瞭然さ。わかったかい？」
「わかったよ。おばあちゃん」
おばあちゃんも、それなりに私を心配しているようだった。
待ち合わせの場所には、すでに敬太が待っていた。
「お待たせ」
「うん」
敬太はいつもどおりの普段着姿。
「じゃあ、行こうか」
彼は私に手を差し出した。私は素直に彼の手を握る。
「うんっ」
私が頷きながら言うと、彼は私の手を引っ張って歩きはじめた。
最初は、お祭りの屋台から回り始めた。
「何が一番おいしいの？」

「夏はやっぱり、かき氷かな」
彼は私を引っ張って、かき氷の屋台へ向かった。
「あっ。雫ちゃーん」
すると、友達の声が聞こえた。見ると、数十人の団体。すべて、クラスの女の子たちだった。
「久しぶりぃ」
私と彼は、友達に近づきながら言った。
「あっ。デート？ごめんねっ。邪魔しちゃって」
彼のことに気づいて、友達は言った。
「でもいいよねぇ。相手が委員長で」
別の友達が言った。
委員長は何気に女子から人気があり、何故か私と付き合うことにみんなは納得しているらしい。
「じゃ、行こうか。お邪魔になっちゃうし」
みんな私に手を振り、口々にお幸せに、と言った。
「じゃあ、行こうか」
私は彼に引っ張られて、屋台を巡った。
彼の家に着く頃には、もう花火が始まる直前だった。
「急げっ急げっ」
彼は私を引っ張りながら、家に向かっている。
「あっ」
足下に違和感。
「どうしたの？」
「紐が切れた・・・」
足下を見ると、無惨にも緒が切れていた。
「仕方ないなぁ」
彼は私を持ち上げて、早足で歩き始めた。
「やっ、ちょっ。恥ずかしいよ」
しかも、お姫様だっこだし。
「だって。おんぶは無理だから」

彼はさらり、と言った。
彼の家は、小さなアパートだった。
「始まっちゃったね」
私は彼に悲しそうに言った。
「そうだね。でも、いいよ。楽しかったからね」
彼は笑顔で言った。
「一人暮らしだったんだ。始めて知ったよ」
「うん。そうだよ」
私は花火より、始めて入った彼の部屋を見る。
シンプルな部屋で、ベッドに机、本棚にタンスやテレビやＭＤコンポ、台所と実に必要最低限のものしかなかった。
「あー・・・。今ので終わっちゃったかぁ」
と、彼の残念そうな声が聞こえた。彼は立ち上がり、部屋の電気をつけた。時刻は八時半。
「どうする？雫ちゃん。帰るなら、送っていくけど」
「まだ、いいよ」
「いいの？お母さんたち、心配しない？」
「大丈夫よ」
心配そうな顔をしている彼とは裏腹に、私は少し楽しんでいた。
それから、時間が過ぎた。時刻は九時過ぎ。その間、私たちはたわいのないおしゃべり。
「雫ちゃん。ホントに大丈夫？」
「平気だよ」
「・・・・・」
私は、彼の顔を見て、胸が苦しくなった。
なんで、彼は私を帰そうとするの？
「ねぇ、敬太」
「なに？」
「私のこと、好きだよね」
「ああ。大好きだよ」

「そうだよ・・・ね」
彼の言葉は、偽りもなく、素直な『好き』だった。
「なら、なんで私を帰そうとするの？」
「なんでって、心配だからだよ」
彼は少し、強めに言った。
「ホントに？」
切なくなる私。なんでか、彼の考えていることがわからない。
不安に、なってきた。
「ホントだよ」
彼の目は、小さな子供に叱るような眼差し。
「・・・・・」
私は言葉より早く、行動してしまった。
私は床に座っていた彼を無理矢理立たせ、ベッドに押し倒した。
「痛っ。し、雫？」
「・・・抱いて」
「えっ？」
私は、瞳に涙を溜めながら彼に、必死に言う。
「大好きなんなら、抱いてよ。できるでしょ？」
「まだ、早い・・・よ。雫ちゃん」
彼は、何も抵抗せず、私に言った。
「早くない。いい、私、敬太になにされても」
「ダメだよ。もし、どっちかが病気になったら？雫ちゃんが妊娠しちゃったらどうするのさ」
「いい。敬太なら」
私はそのまま、敬太に抱きついた。
「お願い・・・。抱いて」
涙で、上手く言えない。
「・・・ダメだよ。雫ちゃん。落ち着いて、考えようよ」
あくまでも、彼はやらないと言ってくれた。
あの時、私はそこで止めるべきだった。

「・・・敬太がその気じゃないなら」
私は敬太から離れると、片手を彼のズボンにやった。
「その気にさせてやる」
私は片手で素早くズボンのチャックを開ける。
「ばっ！？雫っ」
彼は片手で抵抗したが、虚しくも届かない。
私は彼のモノを取り出す。そして、ゆっくりとしごき始めた。
「っ！！」
快感か何かで、彼は顔を歪ませた。
彼のモノは、だんだんと大きくなっていく。
私はゆっくり顔を彼のモノに近づき、口に含んだ。
「あっ！」
彼のあえぎ声。私は初めて、モノを口にいれた。どうすればいいのかわからず、いろんなところを舐め、口で上下に動かしたりした。
「だ、だめ・・だっ。出るっ！！」
数分後、私の口の中に苦い液体が広がった。
「んんっ」
私は耐えられず、口からモノを出して、液体を吐き出した。白濁色だった。
「はぁ・・はぁ」
私は浴衣の帯を緩ませ、下着姿になった。
とっくに濡れているパンツを脱ぐ。
「敬太、触って」
私はアソコを彼に近付けた。
「雫・・・」
彼は、ゆっくりと私のアソコを触り始めた。
「あっ。んんっ！」
彼の指が、私の中で動いたり、出したりしているのがわかる。その度に、水が増すように流れ出る。
「綺麗だね。雫のココ」

次第に、水音が聞こえてきた。
「あっあっんっ。ああっ。んぁっ」
私は、知らず知らずに声が大きくなっていく。
「も・・う、がま・・・ん、できないっ」
私はアソコを彼のモノに近付ける。
「ダメ、だよ・・・。雫。もし、妊娠したら」
「幸せな、家庭を作ろう？」
私は、激痛と共に、彼のモノを受け入れた。
一通り、すべてが終わった。私は、お腹が暖かいことを感じていた。
「気持ち、よかったよ」
私は、軽い放心状態になっている彼に言った。
「明日、お母さんたちに言うよ。僕」
私は、彼なりに責任を感じているんだと感じた。
「ごめんなさい。敬太」
「ううん。僕が、未熟だったからいけないんだよ」
彼は、笑顔で言った。私を責めるわけでもなく・・。
「・・・敬太は、いつも優しいね」
「そうだね。お人好しとも呼ばれるよ」
彼は冗談っぽく言った。
嗚呼、だから私はこの人に惹かれたんだと実感した。その夜は、ママにメールを送って、二人で抱きあって夢の世界に溶け込んだ。
翌朝、私が起きると、いい匂いがしていた。
「おはよう。雫」
彼は、フライパンを片手に私に朝の挨拶をした。
「おは、よう。早い、ね」
半分、寝惚けている私。
彼はそんな私をおかしそうに笑った。
「可愛い可愛い」
彼はそう呟きながら、皿に何かを盛っていく。ここからじゃ、よく見えない。

彼はフライパンを流し台に置き、私に近付いた。
「ほら、起きるよ」
むにー、と彼は私の頬を優しくつねる。
「ふわぁぁい」
「ふふっ」
彼は両手を離すと、キスをしてくれた。
それで、目が覚める。
「さぁ、食べて、謝りに行こう」
「うんっ」
私は精一杯の笑顔で答えた。

ポンポン、と肩を叩かれて、意識が戻る。
「ここ、立ち入り禁止ですよ。今日は見逃してあげるから、飲むなら公園か居酒屋にっ・・・」
唐突に、その人は言葉を切った。
振り向くと、懐かしい顔。
「雫？」
「敬太？」
ほぼ同時に、私たちはお互いの名前を言った。
「何、してる・・・の？」
私は震えながら聞く。
「僕は、このビルでバイトだけど・・・って、雫、君はまだ十九だろ？なんでここでお酒を飲んでるんだ」
子供を叱るような眼差しは相変わらず。
「・・・・・」
私は黙るしかなかった。
「あれから僕、探したんだよ？」
「・・・・・」
彼の顔は、すごく、寂しそうだった。
「今まで、どこで何してたのさ」

「・・・・・」
私は、友達たちがいないことを確認した。私を置いて、逃げたと思う。
「雫っ」
「敬太が・・・優し過ぎて、怖かった」
私は、呟くように彼に言った。
「雫？」
「座って。敬太」
素直に、敬太は私の隣に座った。私は、彼の肩に頭を預けた。
「ねぇ・・・。覚えてる？セックスした次の日」
私は、何故かさっきまで回想していた昔話をし始めた。
「もちろん。覚えてるよ」
彼は頷いて、静かに、語り始めた。

彼は、いきなり土下座した。
しかも、玄関で。
「敬太・・・君？」
ママとおばあちゃんはびっくりしていた。
「申し訳、ありません」
彼は、それだけしか言わなかったので、私も頭を下げて説明した。
説明を聞いたママは、真っ赤な顔になって、パパを呼びに行った。
おばあちゃんだけは、私に近寄って、抱き締めてくれた。
「雫。お前は本当にバカな子だよ」
頭を擦りながら、おばあちゃんは言った。
すると、奥からパパが出てきた。真っ赤な顔で、口をパクパクしている。
「幸治。叱っちゃいけないよ」
突然、おばあちゃんがパパにそう言った。
「母さんには関係ありませんっ」
そう言うと、彼を起き上がらせ、思いっきり殴りつけた。

「敬太っっ」
私は敬太に近寄る。
「大切な娘を、この男はぁ！！」
パパは怒りで震えていた。
パチンッ！
軽快な音が、響いた。
おばあちゃんがパパをビンタした。
「頭を冷やしな。幸治」
「な、なんでですかっ！母さん」
「聞いたところ。敬太君から雫を襲ったわけじゃないよ。雫から、敬太君を襲ったみたいなんだよ。でもね、雫も寂しかったんだよ。聞いたかい？敬太君は夜遅くなるとあたしたちに迷惑だから、雫を帰そうとしたんだよ。でもね、雫は帰らなかった。好きな人と、ずっといたいからね。だから雫は襲ってしまった。だからって雫を叱る必要はないよ。悪いのは、雫をきっちり教育しなかったあたしたちだよ」
おばあちゃんの言ったことは、今となっては屁理屈にも聞こえているが、あの頃は、最高の理屈だった。
「・・・・・」
パパとママは黙って、私たちを見つめた。
「それに、まだ妊娠したとは決まってないじゃないかい。気が早いんだよ。幸治は」
一息、おばあちゃんは吐くと、今度は私のほうを向いて言った。
「雫。あんたも考えておきなよ。もし、妊娠したら、産むのか、中絶するのか」
おばあちゃんの言葉は、少し重しになった。
「・・・私は、産みたいと思う」
「えっ？」
おばあちゃんを除いて、みんなが私を見る。
「中絶って、私の赤ちゃんを殺すんでしょ？やだよ。殺したくない」

私の、切ない切ない願い。
一ヶ月後、私はトイレで妊娠していることに気付いた。

「おばあちゃん、すごかったよね」
敬太は、含み笑いをしながら言った。
「そうだよね。私の、最大の味方だったな」
私は夜空を眺めながら言った。
「妊娠して、結局は、産めずに赤ちゃんが死んで・・・。その後、雫が失踪したんだよね・・・」
敬太は、本当に悲しそうに言った。
「私、後悔してたんだ。赤ちゃん、きちんと産めなくてさ」
私は、泣きたくなるほど、悲しく、切なく言った。
「雫、なんで、いなくなったの？」
改めたように、敬太は言った。
「・・・赤ちゃんが死んだ翌日に、おばあちゃん、死んだこと、知ってるよね」
「うん」
「その時、敬太は優しく慰めてくれた。私ね、怖かったんだ。敬太も、悲しいはずなのに、泣かないで私を慰めてくれて。もちろん、嬉しかったよ。でも、同時に怖かった。敬太の優しさが・・・」
私は、顔を隠すように両足を抱え、顔をうめる。
「・・・・・」
彼は、優しく、私の肩を抱いてくれた。
「私ね。夜の街で、暮らしてたの。風俗やったり、時には売春もした。薬物にも、手を伸ばした・・・」
それでも、敬太は私の肩を抱きしめる。
「君は、本当に、バカだよ。なんで、そんなことするんだ」
彼は、私の顔をゆっくり上げ、じっ、と私を見つめる。
「もう一度、やり直そう。僕の家においでよ。一緒に暮らそう」
「ダメだよ。私、汚れてるんだよ」

「そんなことないよ。汚れてない」
「・・・敬太」
私は、彼にゆっくり、キスをした。制服のポケットに、小さな封筒を入れるのと同時に・・・。
「じゃ、下のロビーで待ってなよ。着替えるから」
彼は立ち上がると、ゆっくりと屋上階段に向かう。
「敬太っ」
私は、最後に、彼を呼び止めた。
「最期に、敬太とキスできて、よかったよ」
「なに言ってるんだよ。雫は」
彼は笑いながら、歩き始めた。
私はそれを、切ない瞳で見て・・・。

堕ちた

階段を降りる直前、鈍い音が聞こえた。
振り返ると、雫がいない。
「雫？」
僕は、彼女が座っていた場所に駆け寄り、下を見る。
「えっ」
そこには、目を疑うような光景。
「雫っ」
僕は急いで下に向かった。降りると、多くの人だかりが出来ていた。
「雫、雫」
僕はそれをかきわけ、雫に駆け寄る。
頭からは、大量の血。
両腕はおかしな方向に曲がり、右足は骨が剥き出しだった。

「雫。なんでなんでっ！」
しばらくして、救急車とパトカーが到着した。

翌朝、警察の取り調べに一日かかり、朝の七時に帰された。
アパートに着くと、血まみれになった制服を洗おうと制服を取り出すと、封筒が落ちた。
「？」
見ると、彼女の字で『遺書』と書かれ、裏には僕の名前と住所が書かれていた。
「雫・・・」
中を開くと、一枚の手紙に、一文だけ書かれていた。

『ごめんね。敬太。ごめんね。赤ちゃん。バイバイ』

「バカ。雫・・・」
日光が、窓から入り込む。小さな光は、手紙を照らし、キラキラとしていた。

田原雫編　了

奥寺麻奈美編

彼女は、私たちを、夜の街へと、誘った・・・。

奥寺麻奈美

県立高校の受験に失敗し、仕方なく都会にある私立高校に進学した。
電車で一時間ちょっと。我ながら中学とは変わらない起床時間で登校せざるを得なくなったのが始まりだったのかもしれない。
さすがは私立とあって、校則は中学校レベル。勉強はやっとこさついていけるレベル。友達は最高のレベル。
もともと、普通科クラスは女子がクラスの半分以下ぐらいで、男子がかなり多い。しかも、ブサイクばっかりで、出逢いも何もない。
だから、私は女子と一緒にいた。
「ねぇ、麻奈美。カラオケ行かない？」
「いいよ～。行こ行こっ」
こういうことはしょっちゅう。部活というものに入ってないからだ。
「もーすぐテストっすねぇ」
「そだねぇ～。やだねぇ」まったりとした対応をしてくれるのが優衣。
「はいはい。しゃきっとね、しゃきっと」
呆れながらつっこむのが梨杏。
「二人とも、和んでるねぇ」
クラス一番の和み系キャラ絵莉花。
「だってぇ。頭悪いから」
「だからってねぇ」
梨杏は深いため息を吐く。

「あー。なんか楽しいこと、ないかなぁ」
「あるよっ」
すると、前から一人の女子が声をかけてきた。
「えーと・・・。佐々木、和音ちゃんだよね？」
「そだよっ」
彼女は愛らしい笑顔で言った。
「なになに？楽しいことって」
優衣がかなり食い付く。飢えてるのかな？娯楽に。
「じゃあ、放課後行こう」
彼女はそれだけ言って、ケータイをいじりだした。

放課後。私たち四人は、彼女の後をてくてくとついていく。
「この道、駅前に行く道だよね？」
「うん。そうだよ。これから行くとこはね、カラオケとかビリヤードとかがある、シャレた感じのバーなの。静かだし、楽しいよ」
彼女は歩きながら笑顔で言った。
「へぇー。バーかぁ」
「あはは。麻奈美ちゃん。ばーかって言ったみたい」
絵莉花が可愛らしい笑顔で言った。
「ホントに？自覚ないんだけどなっ」
私もあえて可愛く言った。しばらく歩くと、見知った街並み。私たちは駅近くのビルの中に入っていった。
「ビジネスホテル？」
「そっ。でもね。この地下にあるの」
そう言うと、私たちはエレベーターに乗り、彼女は何も書いてないボタンを押した。
動いた。
「へぇ～」
三分程度で着いた。扉が開くと、真っ暗でごちゃごちゃと物が置いてある。

「ここ、物置なんじゃ？」
梨杏が言った。
「こっち」
彼女は、まっすぐ歩きだす。私たちも黙ってついていく。
突き当たりには、鉄製の扉。彼女は躊躇いなく開ける。
「いらっしゃい」
中は、薄暗いけどシャレた感じのバーだった。
大きいカウンターがあって、右手にはビリヤード台とダーツ台。奥の扉にはカラオケと書かれていた。
「和音ちゃん、いらっしゃい。待ってたよ」
「うんっ」
カウンターにいたマスター的な人は、慣れた手つきでグラスを拭いている。
よく見ると、かなりのイケメン。しかも若い。
「マスターの高崎さん。私の彼なのっ」
彼女は笑顔で言った。最初はびっくりしたけど、少し納得した。
だって、この二人、なんか似合ってる。
「今日は誰もいないから、貸し切りだよ」
「ぃやったぁ。高崎さん。ジンジャーエール一つ。奥寺さんたちは？」
「私は・・・。オレンジジュース」
「私はコーラ」
優衣が躊躇いなく言う。
「私もコーラ」
梨杏も、楽しそうに言った。
「私はぁ・・・。ウーロン茶でいいやぁ」
絵莉花が言った。
「わかりました。でも君たち。普通バーでソフトドリンク系はないんだけどな」
彼は含み笑いをしながら言って、大型冷蔵庫からドリンクを出す。

そして、一緒に氷も出すと、グラスに氷とドリンクを注いでいく。
「今日は何する予定？」
「んー。カラオケもいいけど、ビリヤードがいいな」
「了解」
私たちは彼女たちの様子を見ながら、ドリンクを飲んでいた。
「なんか、怪しげだよねぇ～。ここ」
絵莉花が言った。
「んー。でも、楽しければいいんじゃない？」
私はおどけて言ってみる。
「ねぇみんな。ビリヤードしよっ」
「いいけど、やったことないよ」
「大丈夫。教えてあげる」
みんな、彼女に手ほどきしてもらい、なんとか球を打てるまでになった。

それからと言うもの、私たちはほぼ毎日通った。時には私服で。たまに怪しいお客がいても、ほとんど騒ぎ放題。私たちにとって、楽園みたい。
「今日どうするぅ？」
ある涼しい日。私は三人に聞いた。
「ごめんっ。私今日行けないんだぁ」
と優衣。
「私も。陸上でちょっと」
梨杏も断る。
「私も～。お兄ちゃんとお買い物っ」
和み系絵莉花も断った。
「じゃあ、私と和音だけか・・・。わかった。じゃあねっ」
私はスクバを持って教室を出ていった。
玄関前。和音が待っていた。
「お待たせぇ～」

「うんっ。行こっ」
初めて、和音と二人で遊びに行く。少し、ドキドキした。
「今日は何して遊ぼうかなぁ。ねぇ、和音」
「そだねぇ。何しよう」
二人でそんな雑談をしながら、いつの間にか着いてしまった。
「ちょっと早く着いちゃったね。大丈夫かな？」
和音が不安そうに言った。
「大丈夫だよ。入ろっ」
私が言うと、和音はしっかりと頷いた。
中に入ると、カウンターにいるはずの高崎さんが見当たらなかった。
「あれ？高崎さんいない」
「ホントだ。どこ行ったのかなぁ」
私たちがカウンターに近づくと、カラオケボックスから声が聞こえた。
「中にいるんじゃない？」
「かもね」
私たちはボックスに歩みよった。
「高崎ぃ、いい加減ヤクを仕入れたほうがええぞ」
の太く、関西弁が聞こえた。
「ですね。質も悪くなってるし、値段も落ち気味。新しいの仕入れましょうか」
今度は高崎さんの声。
「なんの話かな？」
私は小さな声で和音に聞く。
「わかんないけど、なんか危ない話・・・」
和音は不安そうに言った。
「そうだそうだ。近頃、お前のとこに女の子来るだろ？紹介して欲しいな」
今度は若い、別の人の声。
「その話はもうちょっと待って下さい。調教しないとつまらないで

しょ？」
「それだったら、うちの若い奴らに任せればいい」
「いやいや。楽しみを取らないでください」
笑い声が聞こえる。
「・・・帰る？」
「うん。逃げよう」
私たちはゆっくりボックスから離れる。
「待ちや。譲ちゃん」
一人の男に、私たちは捕まった。
「ちょっ。離してくださいっ！」
「ダメやで。聞いちゃいけんこと聞いたな」
男は私たちを無理矢理引っ張り、さっきの部屋に入れられた。
中には、三人の男。
「あん？何してんねん」
関西弁の男が言った。真っ暗なスーツにサングラスをかけていた。
「あれ。和音ちゃんと麻奈美ちゃん」
高崎さんが半分驚きながら言った。
「へぇ～。この子たちね」
若い男が言った。今流行りのカジュアルな格好。
「どうやら、聞いちゃったか。本山さん。後始末はしときます。今日のお話はここまでと言うことで」
「しゃあないの。おい、離してやり。帰るで」
私たちを捕まえていた男は短く、へい、と言うと、部屋から出ていった。
「さて、どうしようか？」
「二人とも可愛いねぇ」
高崎さんとカジュアル男は私たちをまじまじと見る。
「わ、私たち、何も聞いてませんから、帰っても？」
私は恐る恐る聞く。
「荒谷さん。どっちがお好みですか？」

「んー。そっちの女の子かなぁ」
荒谷と呼ばれた男は、私を指指した。
「そうですか。何人か友達呼んでやりたかったんですが、仕方ないね」
二人はじりじりと私たちに近寄る。
「ま、待ってよ。ケンちゃん。何の・・話を・・？」
和音は不安そうな声で、高崎さんに聞いた。
「君たちが聞いた通り。ここはね、いろいろとやってはいけないことをしているんだよ」
高崎さんが和音の肩に触れる。
「う・・・そ」
和音は、さらに不安そうな顔をした。
「ホントさ。麻薬の密売、売春の手助け、時にはここで違法ＤＶＤの撮影も行われていんだよ」
すると、和音は高崎さんにゆっくりとキスされた。
「んんっ！！」
唇から何かが漏れる。透明な液体。
「抵抗されるとつまらないからね。媚薬を使ったよ」
「はぁっ。はぁっ」
和音は辛そうに、胸を押さえた。
「和音っ！」
「だぁめ。君は私と遊ぶんだよ」
私は荒谷に手首を掴まれ、いきなり注射を打たれた。
「あっ」
急に、身体が熱くなる。
「速攻性があってね。新しく出来たレイプ用の麻薬さっ」
荒谷は楽しそうに笑った。
「かず、ねっ」
私は必死に和音を見る。
すでに、脱がされていた。

「気持ちいいかい？和音ちゃん」
「あっ、は、はい・・。気持ちいいですぅ。あっ」
和音は、小さいバイブで遊ばれていた。
「さて、いただきます」
私も、荒谷に丁寧に脱がされていく。

気がつくと、私たちはカラオケボックスの中にいた。
「・・・・・」
無言で見渡す。和音は、いなかった。
「和・・音」
立ち上がろうとしても、力が入らない。見ると、両手には手錠がつけられていた。さらに、足首にも手錠。
「なんで・・？」
「おはよう。麻奈美ちゃん」
すると、高崎さんの声がした。見上げると、彼はそこにいた。
「・・・高崎」
私は睨むことしかできなかった。
「やだなぁ。そんな目しないでよ。君たちが悪いんだよ？」
「知らない、わよっ。和音は、どこよっ」
「あの子はね。とっくに荒谷さんのところに行っちゃったよ。違法AVサイトの看板娘としてね」
「えっ？」
困惑している私に、さらに追い討ちをかけるように彼は続ける。
「あの子は二、三時間前に目覚めてね。ある事実とこのレイプ写真をネタに、承諾してくれたよ」
「最、低・・」
私はさらに強く睨む。
「まぁまぁ。あの子は君の身代わり。君にとっての人質さ」
「どういう、こと？」
「つまりね。君は解放されるのさ。だけどね、君がもし、ここのこ

とを話したら、和音ちゃんは死に、君は恥ずかしいレイプ写真をバラまかれる」
衝撃が、私の頭を真っ白にする。私が誰かに話したら、和音は死ぬ？
「わかったかい？じゃ、君は解放だよ」
手錠を、彼は乱暴に外していく。
「なんで・・こんな・・」
声が震える。恐怖とは、また別の感情が生まれる。
「・・・一つ、聞いていい？」
「何かな」
「あんたにとって、和音はどういう存在なの・・？」
「うーん・・」
数秒、彼は思考して、私に答えた。

「ただの、妹さ」

「えっ・・？」
耳を疑った。妹？和音は、コイツの妹なの？
「ウソよ・・」
「ホントだよ。第一、僕だってわかったのは一年前さ。初めてあの子がここに来たとき、一応調べたのさ。そうしたら、あの子は血を分けた僕の妹だったのさ。両親が離婚したとき、あの子は母のほうに引き取られたんだろうね。戸籍もちゃんと書いてある」
彼は笑いながら答える。
なんで、こんなに、笑いながら言えるの？
「じゃあ、なんでこんな、こんな・・・」
「さぁ」
楽しそうに笑う。私は、睨むことさえ、やめていた。
「さて、いい加減ここから出てもらうよ。ああ、そうそう。君の体内の薬物は除去したから、大丈夫だよ」
「さて、いい加減出ていってもらうよ」

私は、頭が真っ白になりながら、バーから出た。エレベーターで上に上りホテルを出ると、雨が降っていた。傘も何もない私は、近くの駅の中にある階段に座る。震える手でケータイを取り出し、開く。メールが五通、着信が二回、表示されていた。
メールを開くと、優衣、梨杏、絵莉花、お母さん、お父さん、と書いてあった。着信も、お父さんとお母さんだった。
和音からは、何も連絡がない。時計は、もうすぐ二十二時になろうとしていた。
「和音・・」
私は、電話帳から和音の番号を探す。
「・・ない」
登録しているはずの、和音の番号がなくなっていた。
「・・・・・・」
私は愕然としながら、ケータイを閉じる。虚ろな目で、停まっている電車を見る。
私は、ゆっくりと立ち上げり、駅を出る。
雨は、大粒の涙みたいに降り注ぐ。
私は、身体が濡れるのを感じながら、顔を上げる。
空は、私のココロみたいに真っ暗だ。
真っ白な頭で、和音の空（ココロ）を思考する。
多分、あの子も、真っ暗なのだろうか。

私は、着るものとお金を持って、家を出た。
今日も、私はあの子を探す。

私は、彼女に誘われ、夜の街に溶け込んでいった。

奥寺麻奈美編　了

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6859c/

姫(休載)

2010年10月10日06時29分発行